

# セクシャルマイノリティ当事者による LGBT 活動への抵抗を メディア理解から読み解く

## Understanding Sexual Minorities' Resistance to LGBT Activities through Media Analysis

宮尻 琴実, 坂井田 瑠衣  
Kotomi Miyajiri, Rui Sakaida

公立ほこだて未来大学  
Future University Hakodate  
g2123058@fun.ac.jp

### 概要

本稿では、LGBT 活動に連帯しないと発言している男性同性愛者 1 名を対象に、「LGBT 活動に連帯しない当事者」としての自身の位置づけ方とそのような位置づけをする理由を明らかにした。連帯しない当事者は、自身が LGBT 活動の支援を必要とする存在ではなく、むしろそうした活動が自身の生きやすさに影響を与えることから、自らを LGBT 活動で使用を避けられているカテゴリーである「ホモ」として位置付けていた。

キーワード:セクシャルマイノリティ, 自己執行カテゴリー, ソーシャルメディア

### 1. はじめに

現在の日本社会では、セクシャルマイノリティ当事者（以下、当事者）の理解を推進し自由や権利回復を推進するために、東京レインボーパレードといった当事者支援団体によるセクシャルマイノリティ運動や当事者のための政策を推進しようとする運動（以下、LGBT 活動）が盛んに取り組まれている。その一方で、「LGBT 理解増進法」に反対する当事者支援団体の会見が行われる[1]など、LGBT 活動に注目が集まるにつれて、それらに対して敬遠あるいは嫌悪している当事者の存在も表面化されるようになってきた。

そこで本研究では、LGBT 活動に対して敬遠あるいは嫌悪している当事者が、LGBT 活動によって普及した性カテゴリー（レズビアンやゲイ、トランスジェンダーなど）をふまえて、どのように「LGBT 活動に連帯しない当事者」として自らを位置づけているのか、そしてなぜ「LGBT 活動に連帯しない当事者」として自らを位置づけているのか明らかにする。

これにより、未だ曖昧な定義をもとに性の多様性が説かれているなかで、LGBT 活動あるいは多様性を推進する人々や社会全体と、それに対して嫌悪あるいは敬遠している当事者の対立を、単なる意見の食い違いとしてとらえるのではなく、それぞれの規範の違いに基づく理解のずれとして見出すことを目指す。

### 2. 先行研究

カテゴリーと当事者の関係に関する先行研究はいくつかある（[2], [3]など）。

岡部は、腐女子のアイデンティティについて、ベッカーのラベリング理論を引用しながら説明している[2]。腐女子たちは自らを「腐女子」と自嘲しながらもラベリングすることで、腐女子の集団と腐女子でない集団を区別している。その区別をすることによって、「あそこはこうだけど、こちらはこうだね」というように、「アイデンティティを可視化するだけでなく、コミュニティどうしの境界を可視化」していると述べている。

鶴田は、Sacks の成員カテゴリー化装置の考え方をを用いながら、性同一性障害のカテゴリーにおける当事者の位置づけを分析している[3]。性同一性障害のなかでも、治療の度合いによって分けられる 3 つのカテゴリーについて、医療的な診断を行う医療者によって決定される「他者執行カテゴリー」でありながら、その当事者が「正当な」当事者であるかどうかは、当事者間で争われる「自己執行カテゴリー」であると述べている。

### 3. 方法

本研究の目的について調査するためには、対象となる当事者が抱えもつ価値観や規範を知る必要がある。そこで、当事者の発言に対してエスノグラフィックな「厚い記述」[4]を行うことで調査する。これにより当事者が置かれている文脈をふまえたうえで発言の意味づけをすることで、その人が抱えもつ価値観や規範をより詳細に理解することができる。また、今回の調査では Twitter 上で発言している当事者を対象に行う。Twitter では、考えや出来事をだれでも簡単に匿名で投稿でき、さらに LGBT 活動に関する情報が多く流れている。したがって、LGBT 活動に対して批判的な発言を

する場として使われやすい。

以上をふまえて、本研究では Twitter 上で発言している当事者 1 名を対象に調査を行う。対象者は Twitter では本名ではなくハンドルネームを使って投稿しているが、本稿では個人情報の特定を避けるために匿名化して「A さん」と呼称する。当該アカウントは、2022 年 3 月に登録され、同年 9 月まで利用されていた。2022 年 8 月 26 日時点で総ツイート数は 1,525 であり、本調査では、うち 73 ツイートを対象に調査を行った。フォローしているアカウント数は 26、フォローされているアカウント数は 101 であった。ツイートの内容から年齢は 30 歳以上で、男性同性愛者であると自称していた。

## 4. 分析

### 4.1. 連帯しない当事者としての位置づけ

A さんのツイートから、従来の性カテゴリーをふまえ、まずはどのように「LGBT 活動に連帯しない当事者」として自らを位置づけているのか分析を行う。

#### 4.1.1. 男性同性愛者を表すカテゴリー

A さんのツイートを概観すると、男性同性愛者を表す様々なカテゴリーの一部を、一般的に用いられているものとは異なる定義に基づいて用いている様子が見られた。そこで、A さんが男性同性愛者を表すカテゴリーをどのように定義しているのか、事例を用いながら明らかにする。

A さんは、男性同性愛者を表すカテゴリーとして「ゲイ」、ゲイ (Gay) の頭文字をとった「G」、一般的には差別的な意味合いを含む「ホモ」を用いていた。

「ゲイ」については、一般的に用いられるものと同じような用いられ方がなされていることが事例 1 から読み取れる。ここでは、「世の中の人たちは(ゲイも含め)」と発言していることから、A さんは男性同性愛者全般を示す言葉として「ゲイ」を用いている。

(事例 1: 2022 年 7 月 29 日)  
LGBT 活動家は活動を進めれば進めるほどぼろが出てくると思います。(中略) 世の中の人たちは(ゲイも含め) 気づいていますよ 全部人権ビジネスだということに

一方で「G」と「ホモ」の定義については、一般的な用法とは異なる用いられ方がなされている。事例 2 で A さんは、「LGBT 運動に連帯しないホモは G ではない」と発言している。よって、「G」を LGBT 運動に連

帯している男性同性愛者、「ホモ」を LGBT 運動に連帯していない男性同性愛者として用いている。

(事例 2: 2022 年 7 月 22 日)  
そもそも論として、いいですか、LGBT 運動に連帯していないホモは G ではないんですよ。

まとめると、A さんは「G」を LGBT 運動に連帯している男性同性愛者、「ホモ」を LGBT 運動に連帯していない男性同性愛者、「ゲイ」を男性同性愛者全般という意味で用いていることがわかる。

#### 4.1.2. 自称に用いられる「ホモ」「ゲイ」

これらをふまえたうえで、A さんは「ホモ」と「ゲイ」を自己執行カテゴリーとして用いていた。

A さんは、男性同性愛者であることを自称するときに「ホモ」を用いることが多い。例えば、事例 3 では、A さんは「ホモのオレ」と発言していることから、自身を「ホモ」と表現している。さらに、LGBT 活動に連帯しないという強い意志があり、連帯している人に対して嫌悪感を抱いている様子が見られる。つまり、A さんは LGBT 活動に連帯しない男性同性愛者として「ホモ」と自称している。

(事例 3: 2022 年 8 月 15 日)  
はっきりいっておく、ホモのオレはレズやトランスジェンダーと LGBT だのといっただけで連帯するつもりは、これっぽっちもない。自分以外の相手にたいして、この女はレズだから仲良くしよう、とも何かしたいという気持ちは 1mm もわからない。LGBT という概念はクソだと思っている。

他方で、事例 4 のように「ゲイ」と自称する場合もある。事例 4 は選挙に関する引用ツイートである。このようなツイートは不特定多数の人の目に届きやすいため、「ホモ」を用いると差別的な意味合いが伴い、ツイートとしての重大さが失われてしまう恐れがある。そのため、一般的によく使われる「ゲイ」を用いることで、読み手に「正当な」男性同性愛者であることを示し、中立的な立場で意見を表明しようとしている。

(事例 4: 2022 年 8 月 3 日)  
私はゲイですが、同性婚に断固反対します。

以上のように A さんは、政治的な発言をする場合などに「正当な」男性同性愛者であることを示すときは「ゲイ」、それ以外は、LGBT 活動に連帯しない当事者として「ホモ」を用いていた。

### 4.2. 連帯しない当事者としての「ホモ」

次に、A さんがなぜ LGBT 活動に連帯しないと発言

しているのか明らかにする。

事例5は、厚生労働省が新たな財源確保のために「こども保険」の導入を検討していることが書かれた記事の引用ツイートである。引用元の記事には、セクシャルマイノリティに関する内容は一切かかれていないが、Aさんは同性愛者であることからパートナーとの間に子どもを授けられない人として発言をしている。

(事例5: 2022年8月17日)

というか、ホモには子供がいらないから更なる増税っばいんだけれど、まあ仕方ないとは思っている。ただ、これで少子化対策になるかと言われたらならない。子供作るのって3Kみたいに言われているトレンドを変えなきゃいけないんだよ。ホモが息苦しくなるくらい。自分らしく生きていいとか違う。

この記事に対する反応として、子どもがいなくてできない人から税金をとることに反発している様子が多くみられた。けれどもAさんは、こども保険が「少子化対策なるかと言われたらならない」と発言しているにもかかわらず、増税を「仕方ない」ものとして受け止めている。また、少子化対策のためには、「ホモが息苦しくなるくらい」に子どもを作るトレンドを変えないといけなく指摘しており、そのトレンドが「自分らしく生きていい」という考え方とは異なると発言している。この「自分らしく生きる」という文言は、LGBT活動のなかで多様性を象徴する言葉として用いられることが多いものである。

このことからAさんは、「ホモ」をパートナー間で子どもをもたない存在として捉えたうえで、男性同性愛者が生きやすい社会になることよりも、日本という国が存続するために少子化問題を重視している。そして、少子化対策のためには「ホモ」は必ずしも自分らしく生きてはいけなく考えている。一方で、多くのLGBT活動では同性愛者を含むセクシャルマイノリティがありのままの自分として生きることができるようになることを標榜している。したがって、LGBT活動はあらゆるセクシャルリティが受け入れられていない社会を問題視しているが、Aさんは性の多様性が受け入れられることで日本の人口減少にさらなる拍車がかかることを問題視している。つまり、AさんとLGBT活動では、将来の日本社会のために焦点を当てるべきであると捉えている問題が異なることがわかる。

Aさんが性の多様性にまつわる問題を重要視しないさらなる理由として、「ホモ」にとっては他者からの支援・理解は不要であると捉えていることがあげられる。事例6、事例7は、厚生労働省が学校教員用の手引書に

セクシャルマイノリティの児童生徒への対応に関する項目の追加を検討していることが書かれた記事(LGBT理解, 手引書刷新へ 教員向けに文科省: Yahoo!ニュース (共同通信))に対するツイートである。

(事例6: 2022年8月13日)

「有識者らがまとめた改訂案」  
この有識者というのが、本当に問題だということに気づいた方がいい。だいたい、なんでホモなことを学校の先生にわざわざ言わないといけないのよ。馬鹿じゃないか。

(事例7: 2022年8月13日)

「新たな流れに、支援者から「一歩前進」と期待の声が上がる。」  
支援者って何? ホモの支援者? 悪いけど気持ち悪い  
繰り返すけど、学校の先生に何故自分の好きな子の話をするわけ?  
ホモをわかってない

これらの事例からAさんは、学校の先生に自身が男性同性愛者であることをカミングアウトすることに強く抵抗している。さらに、事例6では有識者、事例7では支援者という存在が「ホモ」にアプローチすることに対して嫌悪感を抱いている。

記事では、当事者である児童生徒が教員にカミングアウトすること自体については記述されていないが、「性的少数者の児童生徒への対応に関する項目を盛り込む議論を進めて」おり、「現在は理解度にばらつきが大きく、学校での指導や接し方が原因で傷つく子どももいる」と書かれている。これを受けてAさんは、性的少数者の児童生徒への対応として学校での指導や接し方が新しい手引書に基づいて変わると理解し、教員が指導や接し方を変えるには性的少数者の児童生徒が誰であるのかを知らなければならないと解釈したことで、学校の先生にカミングアウトすることが助長されることを懸念する発言をしている。

また、記事や記事に対する多くの人々の反応では、セクシャルマイノリティへの理解・支援は必要なものだという規範が前提となっている。例えば、「有識者らがまとめた改訂案」には「良き理解者となるよう努める」と書かれ、人々の反応ではセクシャルマイノリティへのケアは必要だが教員の負担が増加することを心配するものが多く見受けられた。しかし、Aさんは「ホモ」には支援は不要であると発言している。

これらのことから、一般的なセクシャルマイノリティ理解は、セクシャルマイノリティとは支援すべき対象であり、そのためには誰が被支援者であるのかを明かす必要がある。つまり当事者がカミングアウトすることが前提となっている。そして、カミングアウトし

た被支援者に対して教員などの周囲の人々が肯定的に受け止めることを希求している。その一方で、Aさんは「ホモ」への支援は無用の長物であり、「ホモ」は被支援者ではないと捉えている。したがって、カミングアウトすることも不要であると理解している。

以上のことから、Aさんにとって「ホモ」は被支援者ではなく、むしろ「ホモ」への支援は不要なものであると捉えている。よって、当事者を支援しようとしているLGBT活動とは相反した当事者理解に対する認識を持っている。さらにLGBT活動が積極的に取り組まれることによって、少子化問題が深刻になり日本という国の存続が危ぶまれることを危惧し、LGBT活動に対して強い反発を示している。

## 5. 考察

以上の分析をまとめるとAさんは、男性同性愛者を表すカテゴリーの「G」と「ホモ」をLGBT活動に連帯しているかどうかでカテゴリーを使い分けていた。そのなかで、一般的には差別的な意味合いを含むと他者執行カテゴリーの「ホモ」を、LGBT活動に連帯しない男性同性愛者と再定義することで自己執行カテゴリーとして用いていた。また、LGBT活動では、当事者は支援されるべき存在であると考えられ、当事者が日本社会において肯定的に受け入れられることが目的になっている。けれども、Aさんにとって男性同性愛者は支援されるべき対象ではなく、LGBT活動によって性の多様性が受け入れられることが逆にAさんにとって生きづらいものとなってしまう。よって、AさんはLGBT活動に連帯しない当事者として自身を位置づけることが合理的なのである。

これらのことをふまえると、Aさんにとって「ホモ」は「LGBT活動に連帯しない男性同性愛者」を表すだけでなく「他者からの支援が不要な当事者」であることを表すカテゴリーである。なぜなら、男性同性愛者を表すカテゴリーのなかでも、LGBT活動でよく用いられている「ゲイ」や「G」を「LGBT活動に連帯しない男性同性愛者」として用いてしまうと、LGBT活動から自らを完全に切り分けることができず、被支援者としてみなされてしまう可能性がある。したがって、LGBT活動でむしろ使うことを避けられている「ホモ」を用いることで、自らをLGBT活動から完全に分離した存在として扱うことができる。そして「ホモ」として自らをラベリングすることによって、連帯しない当事者としての

「アイデンティティを可視化するだけでなく」、LGBT活動を推進する人々と連帯しない当事者の「コミュニティどうしの境界を可視化する」ことが可能となっている[2].

## 6. 結論

本研究では、LGBT活動に対して敬遠あるいは嫌悪している当事者が、従来の性カテゴリーをふまえて、どのように「LGBT活動に連帯しない当事者」として自らを位置づけているのか、そしてなぜ「LGBT活動に連帯しない当事者」として位置づけているのかをAさんのツイートから明らかにした。

Aさんは、自身がLGBT活動の被支援者でなく、これらの活動が盛んにおこなわれることで不利益を被ることから、連帯しない当事者として位置づけていた。その際、LGBT活動で使用を避けられている「ホモ」というカテゴリーを用いることで、連帯しない当事者として自身を可視化し、LGBT活動のコミュニティとの境界線を可視化させ、強化することに成功していた[2].

Aさんがこのような位置づけをする背景には、Aさんがもつ知識や経験だけでなく、Aさんがこれまでおかれていた社会的立場や環境、またLGBT活動の変遷や人々からの受け止められ方など、あらゆる要素が深く関わっている。これらの側面に注目せず、LGBT活動とそれに対して敬遠・嫌悪している当事者との意見の対立を単なる意見の食い違いとしてみなすことは、それらの当事者に対して安易なレッテルを張り、差別や偏見として扱われることにつながりうるかもしれない。したがって、セクシャリティだけでなく考え方や価値観の多様性を目指す社会であるためには、その人が抱えもつ規範にまで踏み込んで他者を理解する必要があると考えている。

## 文献

- [1] 産経新聞. (2023, May 1). 性的少数者団体会見「LGBT法は不要」, <https://www.sankei.com/article/20230501-G2ZLVYKWINOIVNPFJBSTRIARQE/>, last accessed on 20. 7, 2023.
- [2] 岡部大介 (2021). ファンカルチャーのデザイン 彼女らはいかに学び、創り、「推す」のか、越境する認知科学 8 共立出版
- [3] 鶴田幸恵 (2009). 性同一性障害のエスノグラフィ 性現象の社会学 ハーベスト社
- [4] 藤田結子・北村文 (編) (2013). 現代エスノグラフィー 新しいフィールドの理論と実践 新曜社